

博士論文（要約）

中世キリスト教世界の〈叫び〉

——「敬虔な女性たち」と一般信徒をめぐって

後藤 里菜

西洋中世世界で声と音が重要である点は、すでに中世史研究者の間で共通認識となっている。中世世界が、誰もが死後の救いを求めた「キリスト教世界」である点もまた同様である。そして、〈声〉は、その「キリスト教世界」としての中世で、祈りや告解、説教などを通じて重要かつ基本的な役割を果たしていた。それならば、〈声〉のうち、いっそう極端な形態である〈叫び〉には、より明確な意義や役割があったのではないか。だが具体的な研究成果は未だ存在していない。

上記の背景のもと、中世キリスト教世界の〈叫び〉を考察したのが本論文である。研究目的としては大きく二つある。第一に、〈叫び〉に注目することによって、一般信徒を視野に入れた中世の多様な信仰世界のありよう、〈靈性〉の変容をこれまでにない形で照らし出すことである。第二に、そのような宗教的な〈叫び〉の意味・役割について、全体的な変化の方向性を捉えるとともに、〈叫び〉を通して中世を探究したことによる包括的な成果を提示することである。

論文は三章立てで構成されている。第一章は「救いの叫び、罪の叫び」の表題のもと、第二章・第三章で中心的に扱う 12 世紀後半以降の時期よりも前に、中世世界で〈叫び〉が持っていた意味合いを確認するものとなっている。修道院戒律、典礼定式書、聖人伝、エクセンプラ集、異界探訪譚、修道士の著作など多岐にわたる史料を、各々の先行研究に依拠しつつ、〈叫び〉という新たな切り口からまとめ直した。

第二章は、『敬虔な女性たち』の叫び ——『新たな聖なる〈叫び〉』の展開」と題され、〈靈性〉の展開を背景に 12 世紀後半以降に台頭してきた女性たちの伝記をもとに、そこに見られる〈叫び〉の意味・役割の変化を捉えるものとなっている。12 世紀後半から 15 世紀に至るまでの 12 名の女性を扱っている。

第三章は、「一般信徒を含む集団的宗教運動と〈叫び〉」の表題のもと、第二章では主に個々の女性たち「個人」に注目したため、翻って「集団」で行われた宗教運動での〈叫び〉の意味・役割の変化を照らし出すことを試みたものとなっている。事例として、十字軍、少年十字軍、アレルヤ運動、鞭打ち苦行団の運動、ジェズアーティ会の運動、ピアンキ運動を取り上げた。運動の様子を記述した年代記、および、運動の首謀者による書簡、伝記、ラウダなどを史料として用いている。

本論文の成果としては、三点が挙げられる。第一に、宗教的な〈叫び〉の意味・役割から、中世ヨーロッパの信仰世界をこれまでにない形で照らし出した。第二に、〈叫び〉の意味・役割の変容を、盛期中世以降の新たな〈靈性〉の担い手であった「敬虔な女性たち」および、一般信徒たちの集団的な宗教運動に注目しながら明らかにした。第三に、盛期中世から中世終わりにかけての、人間と神との関わり方の大きな変化を〈叫び〉を通して掴むことができた。

西洋中世において〈叫び〉には、悪魔や〈罪〉と関わる否定的な意味づけが根強く存在し続けた一方で、むしろ〈救い〉に関わるものとして、遠くの神に呼びかけ、願いながら、繋がる手段となる役割と、繋がっていることを端的に示す役割があった。しかしそれらの〈

救い>に繋がる役割は、<身体>と<感情>を通じた<霊性>の展開により、鞭打ち業をはじめとする他の方法で代替され得るようになったため、やや影を潜めることになる。

だが、<叫び>は、<救い>に関わる意味合いを減退させたわけではない。以前のように人間と高みにいる神とを真っ直ぐ一時的に繋ぐのではなく、最終的・理想的なあり方（魂と神との一体化）に向かうまでの「過程」の行為として、<救い>に繋がる新たな方法を発展させたのである。その<叫び>のあり方は、「敬虔な女性たち」という「個人」においても、「集団」の宗教運動においても見いだされた。さらに、神に<叫び>を発してきた人間が、むしろ神から<叫び>を与えられる場合もあった。

つまり、「叫ぶ」(“clamare”)行為はその内実を変化させながら、中世の間じゅう人間と神とをいっそう緊密に繋ぎ続けたのである。人間が「神の<叫び>」になるのは、そのもっとも進んだ段階であり、中世終わりは<救い>の<叫び>の最盛期であると言えよう。その最盛期に至る過程を、多様な史料をもとに描き出したのが本研究である。